



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フリースクールが安心とつながりを得られる場所となるには：札幌市の「フリースクールLIKEPLUS」を事例に
Author(s)	高安, 優夫
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91474
Type	bachelor thesis
File Information	2023takayasuu.pdf



令和5年度 卒業論文

フリースクールが安心とつながりを得られる場所となるには
一札幌市の「フリースクール LIKEPLUS」を事例に一

人文科学科 人間科学コース 地域科学研究室

指導教員 宮内泰介

学生番号 01202026

氏名 高安優夫

目次

1	<u>背景と目的</u>	3
1-1	背景	3
1-2	目的	5
2	<u>方法</u>	5
2-1	研究方法	5
2-2	調査をおこなったフリースクール LIKEPLUS について	6
3	<u>子どもたちが必要とする環境—フリースクールを利用している子どもや利用を検討した子どもの状況から—</u>	6
3-1	フリースクール以外で多様な過ごし方をする子どもたち	6
3-2	フリースクールに通うことへの心理的なハードル	7
4	<u>子どもたちが安心感や喜びを抱く要因</u>	8
4-1	子どもたちの意志で決まる一日の活動	8
4-2	子どもの特性に合わせた活動	10
4-3	他の世代の人との関わり	11
4-4	緊張感を生まない空間	12
4-5	小括	14
5	<u>安心とつながりを生むフリースクールの継続的な運営に向けて</u>	15
5-1	理想の実現に向けた資金繰り	15
5-2	地域の若者支援に携わる人や保護者との信頼関係	15
6	<u>結論</u>	17
	<u>参考文献</u>	17

参考 WEB サイト 18

1 背景と目的

1-1 背景

学校を休みがちとなる児童生徒数は1991年以降、増加傾向にある¹。図1に示すように、中学生の不登校生徒数は2012年以降、年々増加している²。しかし一方で、学校を休んでいる間は自宅にしようとしても、見守ってくれる大人がいないことが少なくない。その理由として、共働き世帯が一般的となったこと、ひとり親・再婚など婚姻の在り方が多様化していることが挙げられる³。そこで近所で活動するにしても、見守ってくれるような関係である近隣住民も十分でないことが多いと考えられる。この背景には地域の人々のつながりが希薄化しているという懸念がある⁴。つまり学校を休みがちになると家庭や地域でも見守ってくれる大人がいないという場面が多いと考えられる。

こうした中で学校に行かなくても大人に見守られながら安心して過ごせる場としてフリースクールは存在している。実際に不登校児童生徒にとって、フリースクールが最も代表的な居場所となっている（石井、2022）。ただ現時点でのフリースクールの設置数は十分であるとは言えない。2015年時点で日本国内のフリースクールに在籍する義務教育段階の子ども数は4,196人である⁵。2015年の不登校児童生徒数は125,991人であるため、不登校児童生徒でフリースクールに通っていたのはわずか約3%となる⁶。フリースクール以外の機関や団体に相談した不登校児童生徒の数も多いが、どの機関や団体にも相談できていない児童生徒も少なくない。2022年における小中学校の不登校児童生徒のうち、校内で養護教諭やスクールカウンセラーに相談したのは50.6%、教育支援センターなどの教育委員会所管の機関で相談したのは16.3%、フリースクールなどの民間団体、民間施設で相談したのは4.0%、その他の団体や機関にも相談していないのは38.2%（114,217人）であった⁷。子どもたちがフリースクールに通うことが難しい背景として、フリースクールの数の少な

¹ 文部科学省, 2023, 『令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果』, https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf

² 文部科学省は「不登校」の定義について、「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者（ただし、病気や経済的理由、新型コロナウイルスの感染回避によるものを除く。）」とされている。なお、出典は注1に同じ。

³ 子ども・若者育成支援推進本部, 2021, 『子供・若者育成支援推進大綱——全ての子供・若者が自らの居場所を得て、成長・活躍できる社会を目指して』, https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/f3e5eca9-5081-4bc9-8d64-e7a61d8903d0/e8a6aa01/20230401policies-kodomotaikou-07.pdf

⁴ 参考は注3に同じ。

⁵ 文部科学省, 2015, 『小・中学校に通っていない義務教育段階の子供が通う民間の団体・施設に関する調査』, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tyousa/_icsFiles/afieldfile/2015/08/05/1360614_02.pdf

⁶ 2015年の不登校児童生徒数の参考は注3に同じ。

⁷ 参考は注1に同じ。相談した団体については複数回答である。例えば養護教諭と教育支援センターの両方に相談した児童生徒は重複して集計されている。

さ、経済的な理由、心理的なハードルが挙げられる（石井、2022）。

ここで、まず量的研究によって示されているフリースクールの特徴を取り上げる。フリースクールは他の「オルタナティブな学び舎⁸」と比較して、開放性指向が強いという傾向がある（菊地・永田、2001）。つまりフリースクールは理念や目標に基づく柔軟性を持つ傾向がある。一方で、フリースクールを名乗る組織では教科学習の実施を重視するわけではないという傾向がみられたものの、それぞれの組織の理念や実践は多様であることが示された（藤根・橋本、2016）。この実態から、フリースクールという概念が曖昧であることが分かる。田中（2016）は「フリースクール」概念が濫用されてきた経緯を踏まえ、日本における「フリースクール」は（1）活動内容の自由度が高く、（2）通所や入所で利用する場であり、（3）学校復帰を前提としない場であり、（4）私設機関であり、（5）一条校ではない場を指すのが適切ではないかと提案している。

続いて、フリースクールをめぐる先行研究によって明らかになっていることを概観する。フリースクールに関する先行研究には、森田（2021）などの教育的側面に注目したものがある一方で、「居場所」という視点での研究もなされてきた。佐川（2006）は不登校経験についての沈黙が成員のコミュニケーションを通じてなされていることを明らかにした。そのうえで、不登校経験の当事者と非当事者の間の意図や認識の差異を強調するものは、互いのコミュニケーションによって構成される現実への配慮が乏しいと主張している。また佐川（2010）は、フリースクールに関する研究においてフリースクールの支援者が不登校児童生徒の「受容と共感」の支援を行う担い手として認識される傾向にあると指摘している。

だが、より多くの不登校児童生徒がフリースクールに通うことができるようにするための議論が不十分だと考えられる。日本国内の不登校児童生徒の約 97%がフリースクールに通うことができていない、あるいは通うことを選択していない。この現状を改善するには、（1）フリースクールの増設、（2）家庭への経済的な支援、（3）心理的なハードルを下げる必要があると言える。このうちフリースクールの増設と不登校児童生徒が持っているフリースクールに通うことへの心理的なハードルを下げることは強く関連している。子どもたちが「ここなら通いたい」と思えるようなフリースクールを増やすことが求められている。したがって子どもたちが他者とつながりを得て安心できる場をどう作るかを考えることは重要であろう。個々のフリースクールによって活動理念や雰囲気が大きく異なるものの、事例を取り上げ調査することで子どもたちが安心できる場所を増やすことに寄与できるだろう。

⁸ 菊地・永田（2010）は「フリースクール」、「フリースペース」、「補習塾」、「進学塾」を「オルタナティブな学び舎」と捉え互いを比較している。

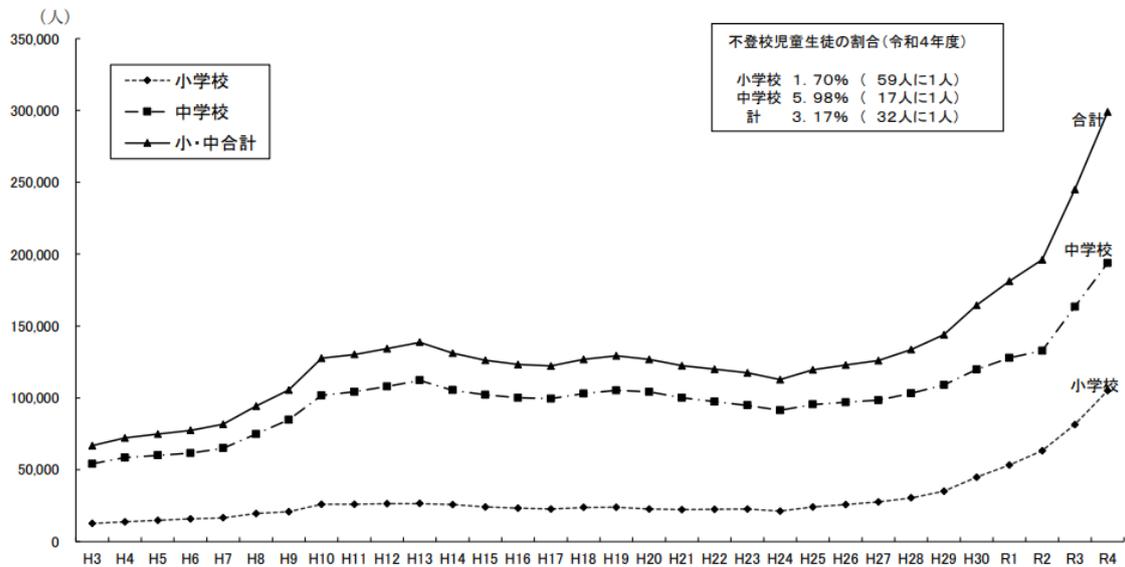


図1 日本における不登校児童生徒数の推移(1991年から2022年まで)

(出典：文部科学省「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」)

1-2 目的

そこで本研究では、子どもたちにとりどのようなフリースクールが他者とのつながりや安心感を得られる場所となりうるか考察する。具体的に次の研究課題を設定する。まずフリースクールに通う、あるいは通うことを模索している子どもたちが、他にどのような活動をしているか明らかにする。またフリースクールに通うことになった子どもたちの心情の変化を明らかにしたうえで、安心できる環境にどのような特徴があるか考察する。最後にフリースクールを運営するにあたり生じる葛藤についても取り上げる。

2 方法

2-1 研究方法

以上の目的を踏まえ、フリースクールでの参与観察とその代表者への聞き取り調査、文献調査を行った。本研究で事例として取り上げるのは、札幌市で活動するフリースクール LIKEPLUS である。札幌市で活動するフリースクール等民間施設は20か所以上あるなかで、ここを本研究の対象地とした理由は主に3つある。第一に、小学生だけではなく中学生も

受け入れているためである。フリースクールを利用している子ども自身の気持ちを聞き取ることを念頭に置いていた。より容易に心情を言語化することができる、中学生との対話を行うことを目標とした。第二の理由は、このフリースクールの活動日数が多いためである。土日祝日以外、週に4回活動しており、学校の代わりとして子どもたちが通うことが可能である。最後の理由は、このフリースクールが学習支援ではなく、子どもたちが安心できる・楽しいと思えることを大事にしているためである。田中（2016）の提案するフリースクールの概念に合致していることから、本研究での事例として取り上げるのに適切だと考えた。

調査にあたり、フリースクール LIKEPLUS にはボランティアとして2023年6月から12月まで、1か月に3、4回ほど活動に参加した。参加した日の様子や会話をフィールドノートに記録した。また代表者へのインタビューも行った。

2-2 調査をおこなったフリースクール LIKEPLUS について

事例として取り上げるフリースクールの概要を説明する。フリースクール LIKEPLUS は札幌市中心部の創成東地区で活動している⁹。2019年にNPO法人E-LINKがフリースクール LIKEPLUS を開設し、現在も運営を担っている¹⁰。10歳以上の児童生徒を10時から14時半まで預かっており、週4日の利用で月額23,000円である¹¹。フリースクールに滞在する子どもの数は日によって異なるが、1日あたり2人から6人ほどが活動に参加している。

3 子どもたちが必要とする環境—フリースクールを利用している子どもや利用を検討した子どもの状況から—

3-1 フリースクール以外で多様な過ごし方をする子どもたち

フリースクール LIKEPLUS の様子を取り上げる前に、フリースクールに通う子どもや利用を検討した子どもの状況に触れる。安心できるフリースクールを検討する際に、子どもたちの日常を踏まえることが必要だろう。

まずフリースクール LIKEPLUS に通う子どもたちの普段の過ごし方について述べる。私

⁹ 創成東地区は札幌市によって「第2次都心まちづくり計画」において「ターゲットエリア」として位置づけられている（札幌市、「創成東地区のまちづくり」、<https://www.city.sapporo.jp/kikaku/downtown/areamanagement/soseieast.html>, 2023年12月12日取得）。

¹⁰ NPO法人E-LINK『2022年度活動報告書』, <https://drive.google.com/file/d/1y7hBQ5Dhw-fqKokztlGyfPey0hG5kHI4/view>.

¹¹ NPO法人E-LINK「フリースクール LIKEPLUS」, (<https://adventureclubsapporo.com/works/free-school/>、2023年12月4日取得）。

が話を伺うことができた子どもたちの中には、学校にも通いつつフリースクールに通う中学生や夏季に毎日のように市民プールに行く中学生、絵の習い事に通う小学生がいた。フリースクール LIKEPLUS の設立者で NPO 法人 E-LINK 代表理事の日向洋喜さん（1992 年生まれ）にも通っている子どもたちのフリースクール LIKEPLUS 以外での生活について伺った。

ここに來てる子は結構詰まっている子多いかもね。A とかもね。なんか他の場所行ったりとか、学校行ったりとか、水泳やったりとか、スケボーやったりとか。でも、C とかたぶん何もないときは、ずっと寝てるとか。「休み何やってた？」って聞いても、「ずっとベッド」みたいな。そういう子も多いかなと。昨日たまたま 1 年に数回しか來ない小 5 の男の子が立ち寄って。お母さん仕事休みで行ける時とか。5 年生になってすごい、久しぶりってポーンて顔出してきた、ちょっとどっか遊ぶとこないみたいな感じで。……フリースクール 2、3 個転々としてて、この曜日はここ、この曜日はここみたいな。まあそういうパターンもあるかもね。¹²

この語りからも分かるように、子ども本人の趣味や好みによってフリースクール LIKEPLUS 以外での活動内容が大きく異なる。ただ、誰かと会う用事がないときには家で休むという子もあり、活発に何かをすることは限らないと言える。ここで特徴的なのは、曜日によって異なるフリースクールを利用するという事例である。フリースクール LIKEPLUS は最多で週 4 日まで通うことができる。複数のフリースクールに通うことで月曜日から金曜日まで外で活動する機会が得られる。おそらく平日に保護者が仕事で自宅に居られないという場合、その日中に子どもが通う場所が求められるのだろう。

3-2 フリースクールに通うことへの心理的なハードル

続いてフリースクールの利用を検討したものの通うことにならなかった子どもたちの状況について触れる。より多くの不登校の子たちがフリースクールなどの場所につながりを得られるように考える際、フリースクールに通えていない子どもたちの状況も考慮に入れる必要があるだろう。そこで見学に來たがその後通わなかった子どもについて、日向さんの語りから紹介する。

ここが合う、合わないかというよりは、人と関わるのにまだもう少し時間かかり

¹² 2023 年 10 月 31 日、フリースクール LIKEPLUS での日向洋喜さんへの聞き取りより。

そうかなみたいな印象はあった。例えば目が合わないとか……まだ、言葉にそんなにまだ、なんだろう。強さがないとか……生気がないじゃないけど、そういう印象の子はやっぱりちょっとこっちには来れないかなとかね。……多分やっとの思いでこっち来たとか、やっぱそもそも見学の予定はお母さんが入れるけど、やっぱり当日来れないっていうパターンも結構ざらにあって。ここまできたけど、やっぱりちょっと入れませんかとかよく見たかな。¹³

見学に来たものの通うことにならなかった子には、初めて会う人を前にすることに強い不安があったと考えられる。それが「目が合わない」ということや「言葉に」「強さがない」ということに表れているのだろう。他の人たちとのつながりをもつためには、気持ちを安定させて新たな出会いに向けて心の準備をする必要があるということだろう。

そのため見学したときに通わないという判断をしたとしても、心の準備ができた後で通いたいと思うかもしれない。ここで、フリースクールに通うためにどれだけ心の準備が必要となるかという点を考えるべきであろう。初対面の人と関わることに苦手意識がある子どもにとって、他の人とも関われるが自分の時間を持つことができるという環境が好ましいと考えられる。実際にフリースクール LIKEPLUS では、子どもたちがマンガを読んだり絵を描いたりして各々の好きな時間を過ごす場面が多く見られた。その場の全員で何かしようという時間があまりないという点が、フリースクールの敷居を低くすることにつながると考えられる。

4 子どもたちが安心感や喜びを抱く要因

4-1 子どもたちの意志で決まる一日の活動

ここからはフリースクール LIKEPLUS に通うことにした子どもたちが、そこでどのような活動をしているのか述べる。フリースクール LIKEPLUS では多くの時間はやる事が決められておらず、子どもたちがやりたいことを好きな時間にできるようにしている。どのようなことをやっているのか、エピソードを交えていくつか紹介する。

【2023年9月6日のフィールドノート】

日向さんが E さんに「今日もレジンアート¹⁴の材料とか買いに行く？」と尋ねると、E さん（中学3年生）は行きたいと答えた。E さんはレジンアートが好きで頻繁に制作

¹³ 2023年10月31日、フリースクール LIKEPLUS での日向さんへの聞き取りより。

¹⁴ レジンアートとは、ビーズなどを置いた型に透明な液状の素材を流し入れ、紫外線を当てるなどの方法で固めることでアクセサリなどの作品を作ることを指す。

しており、過去に作ったものを10個ほど部屋の入口に飾り販売していた。他の子どもたちも一緒に行きたいと言っていたので一緒に買い物をしに行くことになった。

昼食後、今日来ていたAさん(中学2年生)、Cさん(中学2年生)、Dさん(小学4年生)、Eさん、日向さんとダイソーへ行った。こんな商品があるのかと口にしながら店内を見て回った。各々が買いたいものを手に取っていった。AさんとCさん、日向さんは他の人と遊べるようなものがないか探し、ビンゴカードなどを選んだ。DさんとEさんはそれぞれネイルアートとレジンアートに使いたい材料を選んで買った。

ここでみられるように、フリースクール LIKEPLUS では買い物などのために外出することができる。またフリースクール LIKEPLUS に来ている子どもたちそれぞれの好む活動が異なっていることが買ったものから伺える。同様に子どもごとに嫌いな活動も異なり、どの程度嫌っているかもそれぞれである。そのため子どものやりたいことや嫌いなことについてコミュニケーションを通してスタッフは認識し、嫌なことを子どもに強いることが無いようにしている。

子どもたちのやりたいことによって活動内容が決まっていくため、年度によってフリースクール LIKEPLUS の活動の特徴が変わる。

多分「色」がその時にいる子たちの「色」で全然違うから。2年前ぐらいは中学生男子がいっぱいで、みんなでスマブラやるみたいな。Switchとか、パソコンのゲームで画面に流して皆ゲームやって、新しく来た人とかもすぐゲーム混ざってゲームで盛り上がりあって仲良くなるみたいな。なんか分かりやすい男子みたいな感じだったし。去年とかは中3女子たちがレジンやってて、それでE(中学3年生)も混ざってとか。どっちかっていうと今A(中学2年生)、C(中学2年生)とかとここで大人とおしゃべりみたいな感じがあるじゃん。なんで、そこにいる子の何が好きか、もしかしたら数年後はH(小学6年生)とかF(小学6年生)たちはお絵かきで混ざる可能性もあるしとか。¹⁵

この語りの冒頭にある「色」という言葉は傾向や性格という意味を持っている。年ごとにフリースクール全体の傾向が変わるという特徴は、来ている子どもたちの性格に合わせた活動を行っているからだと言えるだろう。

また時間によっては部屋の中に、勉強している子、けん玉をしている子、そしてスマートフォンでゲームをしている子がいるといった、各々が好きなことをすることも。子どもたちの要望に可能な限り沿うように柔軟に活動を行っているため、そこで活動してい

¹⁵ 2023年10月31日、フリースクール LIKEPLUS での日向さんへの聞き取りより。FさんとHさんはともに絵を描くのが好きな子である。

る子どもたちは明るい表情を見せていると感じられた。

ただ活動内容があらかじめ決められているわけではないため、新しくそのフリースクールに入ろうか検討している子どもにとっては見学するまで通うか決めるのは難しいと考えられる。この点は活動内容が決まっている習い事や学校と大きく異なる点である。

4-2 子どもの特性に合わせた活動

多くの日々の活動が子どもたちの意志で決まるが、それぞれの子どもの特性を考慮する場面もある。

【2023年9月6日のフィールドノート】

月曜日、Aさんと日向さんたちはFビレッジに行っておにぎりづくりをしたらしい¹⁶。

日向さん「この頃イベントが月曜日に偏ってしまって、月曜日に来てくれるFさんが来れないことがこの頃多いんだよね」

Fさんは外出することを嫌がっているので、外出する予定があるときはスタッフが2人以上いないとFさんが来れないのだそう。

フリースクール LIKEPLUSに通う子どもたちのなかには屋外に出るのが嫌いな子どももいる。イベントなどで外出するときには部屋で留守番をするスタッフがいない限りその子がフリースクール LIKEPLUSに行けないことから、イベントが同じ曜日に集中しないようにしたいと日向さんは語っていた。

また、日によってフリースクールに行くかどうかを子どもが選べるようにもしているとのことだった。実際にどのように子どもが来るか確認しているのか、日向さんに伺った。

Bに関しては来るとき連絡くるって感じかな。Bは固定ではなくて曜日とか。B、気まぐれだから。お母さんが今日行きますっていうので。大体両方から連絡くるけど。曜日固定の週3か週4か、曜日固定の週1か気まぐれが。Dとかも気まぐれ。火水が多いけど。¹⁷

¹⁶ 2023年9月1日から10日まで開催された「KUBOTA presents AGRI WEEK in F VILLAGE」のイベントとして、9月4日に「美味しいおむすびの握り方」を学べる料理教室が開かれた（HOKKAIDO BALLPARK F VILLAGE, 2023, 『KUBOTA presents AGRI WEEK in F VILLAGE』詳細決定, <https://www.hkdballpark.com/news/278/>, 2023年12月19日取得）。

¹⁷ 2023年10月31日、フリースクール LIKEPLUSでの日向さんへの聞き取りより。

予定が決まっているということ自体が好きでない子ども、行くときに日向さんに連絡をするという方法で通うことができるらしい。毎週決まった時間に通わなくても良いというのがこのフリースクールの特徴である。学校に行かない子どもたちの中には同じ時間に決まった場所に行かなくてはならないという状況が得意ではない子どももいるはずである。このフリースクールはそのような子どもが気軽に通える場所となっている。

4-3 他の世代の人との関わり

フリースクール LIKEPLUS では子どもたちの意志で活動内容が決まることが多いが、スタッフやその友人などが小さなイベントの発案をすることもある。私がボランティアとして活動に参加しているときに見られた例を紹介する。

【2023年9月27日のフィールドノート】

今回、スタッフとそこご友人がチベットの楽器などを持ってきてくれた。はじめにスライドでシンギングボウル¹⁸という楽器の紹介をしてもらったあと、ひょうたんのなかに細かい砂のようなものを入れてできた楽器やシンギングボウルに触れた。ひょうたんの楽器は上下を逆さまにすると、3秒間くらい砂浜の波の音に似た音が聞こえた。ひょうたんの中はらせん状の構造になっているため、時間をかけて砂のようなものが中を流れていくのだそう。またシンギングボウルの淵を叩いたり、側面をなでるようにしたりして音を鳴らして楽しんだ。最後はAさん、Cさん、Dさん、日向さん、私の5人で交替しながら四方八方から音を奏でてもらう体験をした。周囲から複数の楽器を同時に鳴らされると人によってはやや目が回るような感覚になる。普段見ることがないものを触るのが楽しそうだった。

また別の日には普段から占いをやっているという方が来て2種類の占いをしてくれた。この事例で登場するHさん(小学6年生)は、ちょうどその1週間前にフリースクール LIKEPLUS に通い始めた。Hさんは他の人と話すのは好きで、周りの子どもやスタッフの声掛けに対して明るく返していた。だがまだHさん自身から周りの人に話しかけられるほど緊張が緩んでいるわけではなさそうだった。

【2023年10月18日のフィールドノート】

特にカードの絵柄から読み解く占いでは、スタッフが相手の子とも普段から接す

¹⁸ シンギングボウルは仏具のりんに似た金属製の楽器である。

る中で感じていることや言いたいことを結びつけてお話しているようだった。
スタッフ「(Hさんのカードの絵柄を見ながら) わくわくするところとか、お茶目なところとか出していっても良いかもしれない。」

このときスタッフはHさんがもっとその場で心を開けるように言葉を掛けたのだろう。フリースクール LIKEPLUSに通う子どもたちは上の年代の人々と関わることで、子ども同士の関わりだけでは得られない精神的な支えを得ることができると考えられた。またいずれの事例においても、スタッフなどによる催しがあることで子どもたちが普段は経験できないことを経験でき楽しそうにしていた。子ども同士で遊ぶとなると日常会話やゲームをすることが多くなる。もちろんそれだけで十分楽しむことはできているが、子どもたちにとって未知のものを体験することも良い刺激になると考えられた。

一方でフリースクールに通う子どもたちは年下と関わる場面もある。夕方になるとフリースクール LIKEPLUSに通う子どもたちは同じ場所で学童保育に通う小学生と顔を合わせる¹⁹。フリースクールに通う中学生は学校から帰ってきた小学生の面倒をよく見ている。小学生が学校の宿題を後回しにして遊んでいると、まず宿題をやろうと声を掛けていた²⁰。年下の家族がいないという中学生でも小学生と親しく話したり遊んだりしていたのが印象的だった。

これらのように、自身と年齢の離れた人たちと関わることで、同年代との関わりだけでは得られない気付きや楽しみがあると考えられた。スタッフから子どもの心情に寄り添った声掛けをしてもらえたり、小学生に頼ってもらえたりするのがフリースクールに通う子どもたちに良い影響を与えているのではないか。ただ、中学生にとって小学校低学年の子どもが常にいるとなると、中学生が自分のやりたいことをできなくて疲れてしまうおそれがある²¹。子どもたちが自分らしく過ごせる時間を持ちつつ、好きなときに他の世代の人たちと関われるというあり方が適していると考えられた。

4-4 緊張感を生まない空間

フリースクールに安心して通うには子ども自身のタイミングも重要であるが、そのフリースクールがいかに居心地の良い場かがカギになる。まず空間の特色がそこで過ごす子

¹⁹ フリースクール LIKEPLUS を運営する NPO 法人 E-LINK は学童保育を行っている。フリースクールを利用している子どもたちは、小学生が来てからは各々その後の予定に合わせるなどして帰っていく。

²⁰ フィールドノート (2023 年 10 月 25 日) より。学童保育に通う小学生たちは遊ぶ前にまず学校の宿題を終わらせることになっている。

²¹ 中学生と小学校低学年の子どもが同じ空間にいると年上の子どもは「年上らしい」振る舞いをするようになってしまうという点は日向さんも指摘していた。こうした理由でフリースクール LIKEPLUS は 10 歳未満の子どもをお断りしており、相談があれば周辺の他のフリースクールを紹介している。

もたちの心にどう影響しているか注目する。

子どもたちやスタッフはフリースクールに来るとまず靴を脱いで、脱いだ靴を靴箱に入れる。部屋の床には人工芝のマットが敷かれており、入口側の壁に沿って背もたれ付きのクッションが並べられている。子どもたちはよくクッションのところやいすに座り、時々芝のマットの上で活動している。人工芝のマットを敷いた理由について、日向さんはこのように教えてくれた。

もともと本当に芝が好きだったんだけど。でも、そもそもこのクッションの上にフローリングのシート貼ったから、もう破けてんだよ。こっち見てわかるけど、どんどんどんどん破けていて。テープで補修しても全然その上からまた破けるから、結局この上に一枚敷かなきゃねってという話。だったらやっぱ芝敷きたいですって。²²

破けたシートを覆うためにマットが必要だった。日向さんは「もともと本当に芝が好き」で、良い機会だから人工芝のマットを敷くことにしたとのことだ。日向さん自身の心が安らぐ空間を作ること、結果としてその部屋で過ごす子どもたちはあらゆる場面でくつろいだ様子を見せている。

またその部屋の形が L 字型になっているのも特徴的である。入口から窓に向かって歩くと右側に 2m 四方ほどのくぼみがある。その空間の壁には本棚があり、マンガや絵本が天井近くまで並んでいる。1 人でマンガを読んだり、勉強したりしたい子どもたちはそのスペースを使うことが多い。そこについて日向さんは「本をゆっくり読むスペースが欲しいよねってというのは構想としてあったかな」²³と述べていた。

居心地のいい空間をつくるためには、生活感を強め日常生活の延長として利用しやすい雰囲気を生み出すと良い（日本建築学会編、2019）。靴を脱いで読書することができる空間は、そこにいる子どもたちに自宅にいるような気分にさせると考えられる。さらにその部屋の照明にも安心感を生む要素があると考えられた。直径 5cm くらいの円形で橙色のライトが天井に 10 か所くらいある。これらの照明が部屋をカフェのような落ち着いた雰囲気に行っていると感じられた。もし照明が白色蛍光灯であればもっと緊張感のある空間になっていたと考えられた。

安心できる場所を得たいという子どもたちにとって、部屋の雰囲気は重要な観点だと考えられる。自宅のようなくつろげる空間にするために、部屋の形や床、照明などを工夫すると良いと考えられる。

²² 2023 年 10 月 31 日、フリースクール LIKEPLUS での日向さんへの聞き取りより。学童の時間に小学生が走り回るからシートがすぐにボロボロになるそう。

²³ 2023 年 10 月 31 日、フリースクール LIKEPLUS での日向さんへの聞き取りより。

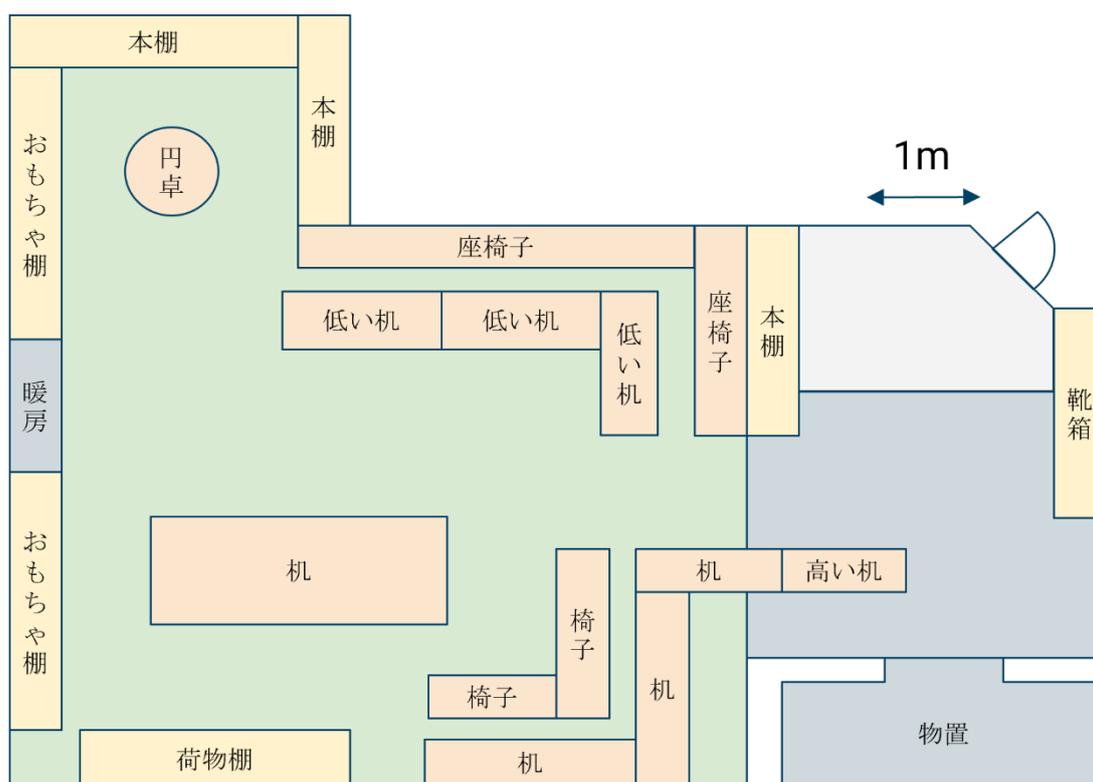


図2 フリースクール LIKEPLUS の部屋の形と家具の配置（筆者作成）

4-5 小括

ここまで見てきたように、フリースクール LIKEPLUS では子どもたちが気楽に過ごせるように工夫がなされている。その根幹にあるのが子どもたちの意志に寄り添うという姿勢である。活動内容は子どもたちの興味や関心を踏まえてスタッフや子どもたちが提案する。もちろん、子どもが嫌なことを他の子どもたちと一緒にさせることはない。こうして子どもたちそれぞれの特性を重視した活動が行われることによって、子どもたちが安心感を得られるのだろう。またスタッフやボランティア、学童保育に通う小学生など、他の世代の人々と関わることによって、同年代の人々との関わりでは得られない発見と喜びを得られると考えられる。大人との関わりで得られる気付きや年下の子どもたちと接するなかでの自身の成長が、日々の活動における喜びにつながると考えられる。さらに空間にも工夫を加えることによって、緊張感を生まない落ち着いた雰囲気のあるフリースクールになる。

5 安心とつながりを生むフリースクールの継続的な運営に向けて

5-1 理想の実現に向けた資金繰り

ここまでフリースクール LIKEPLUS を事例として子どもたちが安心感や喜びを得るために必要と考えられるものを挙げた。ただ実際にフリースクールを運営するにあたり、予算の制約が理想の実現を阻むことが少なくないと考えられる。フリースクール LIKEPLUS においても、札幌市の補助金²⁴や寄付による収入があるものの資金に余裕はないとのことだった。

こうしたフリースクールの設立や運営における資金繰りの葛藤を取り上げる文献が複数ある。武井哲郎（2022）は包摂性と民主性を追求することで事業の支出と収入のバランスが崩れやすくなると指摘している。具体的には（1）生活困窮世帯に対する利用料の減免制度を設けると収入が減る、（2）「従量制」の料金体系にすると収入の変動が起こりやすくなる、（3）個別的な対応を可能にするためにスタッフを増員すると支出が増える、という3点が挙げられている。実際に江川和弥（2021）も20年前にフリースクールを立ち上げてから現在まで、「利用者からいくらお金をとればいいのか？」ということに納得できる答えを見つけられていない²⁵。そのうえではじめからお金に関して完璧なものをめざすのではなく、むしろ保護者と教育観を共有することを大切にすべきだと述べている。

5-2 地域の若者支援に携わる人や保護者との信頼関係

ではここからフリースクールを運営するにあたり周囲の人々との信頼関係が具体的にどう重要となっているかに注目する。フリースクール LIKEPLUS を運営する日向さんにはフリースクールの立ち上げのすぐ後からお世話になっている方（以下、Mさん）がいるという。日向さんはMさんとの関係について次のように語っていた。

学童保育の時、フリースクールやる前からここの活動を見てくれて。多分ね、そう

²⁴ 札幌市フリースクール等民間施設事業費補助金。2012年度より、不登校児童生徒の受け皿となっている札幌市内のフリースクール等民間施設の活動を支援し、児童生徒の社会的自立を図ることを目的として、札幌市は施設の設置者に対し、児童生徒の指導体制の整備、教材や体験学習等に係る経費の一部を助成している（札幌市, 2023, 「フリースクール支援」, <https://www.city.sapporo.jp/kodomo/ikusei/freeschool.html>, 2023年11月27日取得）。

²⁵ 江川和弥は1999年から福島県会津若松市でフリースクールを運営している（江川, 2021）。このフリースクールは個々の時間を大切に「個人の活動」と、こどもミーティングで話し合ったプログラムを実施する「みんなの活動」を実施している（寺子屋方丈舎, 「フリースクール@会津」, <https://www.terakoyahoujyousha.com/%E3%83%95%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%BC%E3%83%AB-%E4%BC%9A%E6%B4%A5/>, 2023年12月21日取得）。

いう仕事柄見てくれてて。フリースクールやりますって時に、一番最初に問合せきたのかな？そう、だからずっと応援してくれてたし。一番最初の一人でワタワタやってみる時も見守っててくれてたから。飲みにも連れてっててくれて。²⁶

Mさんはさっぽろ青少年女性活動協会で活動しているため、同じく若者支援に携わる日向さんの活動に注目していたようである²⁷。Mさんとのつながりができたおかげもあり、他の若者支援や地域での活動により幅広く取り組んでいるとのことだった²⁸。

またフリースクールに通う子どもたちの保護者に協力してもらおう場面もあるとのことだった。2021年に学童保育とフリースクールの場所を移転したとき、フリースクールに通う子どもたちやその保護者に協力してもらえたそうである。保護者にも助けてもらえる理由について、日向さん自身は次のように推測していた。

毎日LINEでこまめにやりとりしてるからね。1日の報告を写真と今日こんなことやってましたって送る。それでね、だいぶこうね。一方通行のこともあれば、フリースクールの場合は返信くれたりもするし。なんとなく信頼関係みたいなのは、それでできてのかもしれないとか。あとはそういうことをやってるから協力するよとか、それだったらこういう人もいるよとか、逆にこんなことしてほしいとか、ぼそっと要望みたいな結構来るかなって。²⁹

毎日子どもの様子をそれぞれの保護者に伝えることで、保護者から信頼されるようになったということのようだ。

フリースクールなどの事業を運営するにあたり若者支援に関わる人とつながることで、活動の幅がより広がる。また保護者と信頼関係を築けると、特別な活動があるときに協力してもらえたり活動の提案をしてもらえたりする。これらの信頼関係を築くために保護者にフリースクールで子どもがどんな活動をしたのか日々連絡するなど、頻繁なやりとりを心掛けるのが必要だと考えられる。

²⁶ 2023年10月31日、フリースクール LIKEPLUS での日向さんへの聞き取りより。

²⁷ Mさんが活動している公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会は、青少年の育成や市民活動の振興に関する事業を行っており、児童会館・札幌市こども人形劇場こぐま座・札幌市若者支援総合センターの管理運営や札幌まなびのサポート事業「まなべえ」などを担っている（公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会, 2023, 「令和4年度 事業報告書」, <https://syaa.jp/wp-content/uploads/2023/06/R4%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8.pdf>, 2023年12月4日取得）。

²⁸ Mさんが活動する団体が発行している冊子にNPO法人E-LINKが取り上げられている（札幌市市民活動サポートセンター, 2022, 「NPO法人E-LINK」『みんなのしみサポ』62: 1-2, <https://www.shimin-si-plaza.jp/sys/wp-content/uploads/2022/02/%E3%81%BF%E3%82%93%E3%81%AA%E3%81%AE%E3%81%97%E3%81%BF%E3%82%B5%E3%83%9B%E3%82%9A-No61-1.pdf>）。

²⁹ 2023年10月31日、フリースクール LIKEPLUS での日向さんへの聞き取りより。

6 結論

本稿では、不登校児童生徒の増加に伴うフリースクールの必要性の高まりを背景として、子どもたちが他者とつながりを得て安心できるフリースクールとはどのような場所なのか、札幌市のフリースクール LIKEPLUS を事例に考察した。

事例からは異なった趣味や個性を持っている子どもたちが同じフリースクールに通っているという様子を読み取れた。フリースクールの利用を検討している子どものなかには、その子にとって新しい場所で初対面の人たちと関わることに不安を抱える者も少なからずいる。このような子どもでも通いやすいように、個人で楽しむ時間とその場にいる他の人と遊ぶ時間を自分の気分で選べるようにすると良いと考えられる。

子どもたちが他者とつながりを得て安心できる要因には、子どもたちが自身の意志や特性に合った活動ができること、他世代と交流することができること、そして緊張感を生まない空間で活動できることが挙げられる。それぞれの子どもが嫌なことを子どもたちとスタッフが会話を通して共有し、子どもの意志を尊重する姿勢を持つことが求められる。

フリースクールを運営するときは金銭面に関して模索しながらも、地域で若者支援に関わる人々や保護者との信頼関係を築くことが重要だと考えられた。ここまで挙げたようなフリースクールが今後増えていけば、より多くの子どもたちが学校ではない場所でも安心して人々と交流できるようになるだろう。

謝辞

本研究でこれまで大変お世話になった、日向洋喜さんをはじめフリースクール LIKEPLUS の皆さんに感謝申し上げます。初めて伺ったときから明るく迎えてくださったのがとても嬉しかったです。また指導してくださった宮内泰介先生、笹岡正俊先生にも心から感謝申し上げます。

参考文献

- 石井志昂, 2022, 『フリースクールを考えたら最初に読む本』 主婦の友社, 20-21, 62-65
- 江川和弥, 2021, 「フリースクールの基礎知識」 NPO 法人フリースクール全国ネットワーク 編『事例からみる フリースクールのつくりかた 設立・運営と新しい学びのカタチ』 日本法令, 41-59
- NPO 法人 E-LINK 『2022 年度活動報告書』, <https://drive.google.com/file/d/1y7hBQ5Dhw-fqKokztlGyfPey0hG5kHI4/view>
- 菊地栄治・永田佳之, 2001, 「オルタナティブな学び舎の社会学——教育の〈公共性〉を再考する」『教育社会学研究』 68: 65-84
- 公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会, 2023, 『令和4年度 事業報告書』,

<https://syaa.jp/wp-content/uploads/2023/06/R4%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8.pdf>

佐川佳之, 2006, 「不登校経験について『語らない』ということ——コミュニケーション空間としてのフリースクールに関する一考察」『一橋論叢』 135(2): 258-278

——, 2010, 「フリースクール運動における不登校支援の再構成——支援者の感情経験に関する社会学的考察」『教育社会学研究』 87: 47-67

札幌市市民活動サポートセンター, 2022, 「NPO 法人 E-LINK」『みんなのしみサポ』 62: 1-2, <https://www.shimin.sl-plaza.jp/sys/wp-content/uploads/2022/02/%E3%81%BF%E3%82%93%E3%81%AA%E3%81%AE%E3%81%97%E3%81%BF%E3%82%B5%E3%83%9B%E3%82%9A-No61-1.pdf>

武井哲郎, 2022, 「フリースクールの運営とその持続可能性」武井哲郎・矢野良晃・橋本あかね編著『不登校の子どもとフリースクール——持続可能な居場所づくりのために』晃洋書房, 79-93

田中佑弥, 2022, 「日本における『フリースクール』概念に関する考察——意識としての『フリースクール』とその濫用」『臨床教育学論集』 8: 23-39

日本建築学会, 2019, 「『まちの居場所』のアイデアガイド」日本建築学会編『まちの居場所 ささえる／まもる／そだてる／つなぐ』鹿島出版会, 148-161

日本建築学会, 2019, 「『まちの居場所』のアイデアガイド」日本建築学会編『まちの居場所 ささえる／まもる／そだてる／つなぐ』鹿島出版会, 148-161

藤根雅之・橋本あかね, 2016, 「オルタナティブスクールの現状と課題——全国レベルの質問紙調査に基づく分析から」『大阪大学教育学年報』 21: 89-100

森田次朗, 2021, 「フリースクールの諸実践から『生きられたシティズンシップ教育』を構想する——居場所・アスピレーション・民主主義」『社会学論集』 20(1): 39-62

文部科学省, 2015, 『小・中学校に通っていない義務教育段階の子供が通う民間の団体・施設に関する調査』,

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tyousa/_icsFiles/afieldfile/2015/08/05/1360614_02.pdf

文部科学省, 2023, 『令和 4 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果』, https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf

参考 WEB サイト

NPO 法人 E-LINK 「フリースクール LIKEPLUS」,

(<https://adventureclubsapporo.com/works/free-school/>, 2023 年 12 月 4 日取得) .

子ども・若者育成支援推進本部, 2021, 「子供・若者育成支援推進大綱——全ての子供・若者が自らの居場所を得て, 成長・活躍できる社会を目指して」,

(https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/f3e5eca9-5081-4bc9-8d64-e7a61d8903d0/e8a6aa01/20230401policies-kodomotaikou-07.pdf, 2023年12月4日取得)。

札幌市, 2023, 「創成東地区のまちづくり」,

(<https://www.city.sapporo.jp/kikaku/downtown/areamanagement/soseieast.html>, 2023年12月12日取得)。

———, 2023, 「フリースクール支援」,

(<https://www.city.sapporo.jp/kodomo/ikusei/freeschool.html>, 2023年11月27日取得)。

寺子屋方丈舎「フリースクール@会津」,

(<https://www.terakoyahoujyousha.com/%E3%83%95%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%BC%E3%83%AB-%E4%BC%9A%E6%B4%A5/>, 2023年12月21日取得)。

HOKKAIDO BALLPARK F VILLAGE, 2023, 「『KUBOTA presents AGRI WEEK in F VILLAGE』詳細決定」, (<https://www.hkdballpark.com/news/278/>, 2023年12月19日取得)。